係、婚姻関係から来る古い時代の女性の生き方、犠牲を犠牲とも感じない、貞節なる女の徳の美しさ、あるいはそれを通し続けたい程の女の想い。それを作者は、折から重なつた精神の極限状態に於て、女のあわれさ悲しさを描き切つている。

おげんは「夜明け前」のお粂であるが、彼女は親の取り決めた婚約に対して、自殺して抗議をするような性格の持ち主である。「家」のお種も同様女主人として家を切りまわしているが、夫が事業に失敗し、女道楽に家出をして苦労する。旧家の家長意義があつて女丈夫のようなところも見えるが、放蕩する夫の前にあつては生血をとられた亡霊に等しい。おげんもお新を頼つて「御霊さま」を信じて生きている亡霊にすぎない。おまけに夫からは病毒を移された狂人である。

この作品で最も感動的なところは、おげんが養生園から精神病院に移るところである。退院と聞かされたおげんは子供のようにうれしがる。しかし着いたところはおげんの座敷牢にすぎない。

藤村は「市井にありて」の中で次のようにいつている。ロダンは足の彫刻をする時、まず全体の体を創ておきその後他の部分を砕いてしまつた。文章に於いてもそのようでなければならないといつているが、この「ある女の生涯」は正にその言葉を裏書きしているような作品である。藤村の短編の中でも特に秀れていて長編に劣らぬ力量を見せている。

解釈と鑑賞

狭衣物語解釈（1）

本田義彦

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、弥生の二十日余りにもなりぬ。御前の木立なにとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は、松にとのみ思はず咲き懸りて山時鳥待ち顔なるに、池の汀の八重山吹は、井手のわたりに異ならず見渡さるゝ夕映のをかしさを、独り見給ふも飽かねば、侍童のをかしげなるして一枝づつ折らせ給ひて、源氏の宮の御方に持て参り給へれば、御前には、中納言・中将などやうの人々侍はせ給ひて、宮は御手習ひ、絵などかきすさびて添ひ臥させ給へるに、「この花の夕映こそ、常よりもをかしく侍れ。春宮の、『盛りには必ず見せよ。』と宣はするものを。」とて、打置き給ふを、宮少し起き上りて見おこせ給へる御まみ・つらつきなどの美しさ、花の匂ひ藤のしなひにもこよなく優りて見え給ふを、

例の胸塞がりまさりて、つくづくとまもられ給ふに、「花こそ花の」と、取り分き給ひて、山吹を手まさぐりし給へる御手つきの、いとど持て囃されて、世に知らずうつくしげなるを、人目も知らず我が身に引き添へまほしく思さるるぞいみじきや。

〔口　訳〕

白楽天の詩に「惜少年春」とあるように、少年は人生の春であるが、春というものはいくら惜しんでもとどまらぬものであるから、その春もすでに陰暦三月の二十日余りにもなつてしまつた。庭前の木立もどことなく一面青味をおび茂りあつて暗いなかに、泉水の中島の藤の花は、「夏にこそ」の古歌にあるように、松に咲き懸るとばかり思つていたのに、思いもかけず夏を待つて咲きかゝつて、山時鳥を待ち顔であるのに、池の汀の八重山吹は、有名な井手のあたりにも異ならず趣深く見渡される夕映の美しさを、独りで眺めているのも物足らぬ思いがなさるので、その方は、侍童のかわいらしげなのに、藤の花と山吹の花とを一枝ずつ折らせなさつて、源氏の宮の御殿の方に持つておいでになると、御前には、中納言や中将などといつた女房たちをはべらせなさつて、宮は御手習や絵などをかき興じてらく寝をしておられる所に、「この花が夕日に照り映えている様は、いつもより趣深いことです。春宮様も『花盛りには必ず見せよ。』とおつしやつていらつしやるのですよ。」といつて、その花をお置きになるのを、宮は少し身を起してこちらを御覧になる御目つきや御顔つきなどの可憐さは、桜の花の色あいや藤の花房のしなやかさにもこの上なくまさつてお見えになるのを、いつものように一層胸がせまつてきて、思わずじつと見守つておいでになるのに、宮は「花こそ花の」という古歌を口ずさびつゝ取り分けなさつて、山吹をもてあそんでいらつしやる御手つきが、花の色に引き立てられて、ひとしおひどくかわゆくお見えになるので、人目もかまわずわが身に引き寄せたくお思いになるその胸のうちは、たいへんなものでありますよ。

〔註　記〕

○少年の春――「背レ燭共憐深夜月　踏レ花同惜少年春」白楽天白氏文集巻十三にあるが、和漢朗詠集巻上春にも載せる。

○松にとのみ――「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」拾遺集夏・源重之

○山時鳥――（参考）「我が宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ」古今集夏・読人知らず

○池の汀の――（参考）「いひやらむ方のなきかな池水の汀に咲ける八重の山吹」夫木抄巻六山吹・小辨

○井手のわたり――山城国相楽郡にあつて古来山吹の名所として有名である。石川雅望・清水浜臣書入本には「春の池や井手の河せにかよふらん岸の山吹そこもにほへり」源氏胡蝶をあげてあるが、古今集以下、井手の山吹をよんだ歌は多い。「蛙なく井手の山吹ちりにけり花の盛りにあはましものを」古今集・読人しらず「春ふかみ井手の川波立ちかへり見てこそゆかめ山吹の花」拾遺集・源順　「道遠し井手へもゆかじこの里も八重

やは咲かぬ山吹の花」後拾遺集・藤原伊家

○一枝づつ――　流布本である承応版本には「づつ」がない。蓮空本・九条家旧本にもない。たゞし、石川雅望・清水浜臣書入本によれば、古本に「づつ」とある由、古本の性質は、巻一は二条院讃岐　巻二は趣前禅尼（首一葉為家卿筆）　巻三は為家卿巻四は後土御門勾当内侍の筆で、松平周防守の家にあるそうである。なお、伏見院御宸筆（詞書）・土佐光秀作（絵）と伝えられる「狭衣物語絵詞」の本文には「づつ」があり、その絵にも藤の花と山吹の花とが源氏の宮の前に置かれてある場面がある。後文の「取り分き給ひて」からも、花は山吹の花だけでない方がよいようであるから、古本によって「づつ」を補った。

○花の匂ひ――　全訳王朝文学叢業では山吹の花ととっているが、こゝは平安時代の慣用的使い方としての「花」、即ち桜の花ととった方がよかろう。中村真一郎氏は日本国民文学全集で「花の匂ひ藤のしなひにもこよなく優りて見え給ふ」を、単に「花よりも明るかった」としてしまっておられる。

○花こそ花の――　「匂ふより春はくれゆく山吹の花こそ花の中につらけれ」続古今集・藤原定家　ふつうこの歌が引かれているが、定家は狭衣物語の制作時代より後の人と考えられるので、引き歌とはなし難い。蓮空本等に「花こそ春の」とあるが、それによると、堀河太郎百首・源師時の歌に「玉の井に咲けるを見れば山吹の花こそ春の盛りなりけれ」がある。

○取り分き給ひて――　藤の花と山吹の花の中特に山吹の花をとったと解すべきであろう。従って古本によって「一枝づつ」と「づつ」を補った。

第十三回生（昭和四十年三月卒業）

荒川　弘子　伊勢大輔考
生嶋　和子　中原中也の人と作品
石原　弘子　枕草子における漢籍引用についての一考察
井上　将　勅撰和歌集における「風」考
井口美代子　「壺井栄の創作態度」
磨井美穂子　川端康成の文体―文章心理学による統計的考察―
江口　史子　志賀直哉の青春　日記よりみた「范の犯罪」と「大津順吉」
榎田　伸子　徒然草の自然描写に現われた兼好の思想について

卒業論文題目

大場　充恵　太宰文学の本質―「新釈諸国噺」と西鶴の原典との比較を契機とする―
岡田　伸子　近松門左衛門作「堀川波鼓」について
鬼塚　博子　室生犀星の初期の詩―「感情」収録の詩を中心として
笠間　節子　徳田秋声「仮装人物」に実った作家根性
桂　涼子　春の季語について―万葉、古今、新古今、玉葉、新続古今―
加藤　裕子　浄瑠璃の型式について
坂井　方　徒然草に於ける有職故実の段について